

2025年5月総評 暮田真名

ほむらひろしに短歌をください

鷹枕可

「短歌ください」は『ダ・ヴィンチ』の投稿企画。穂村弘による長寿連載である。企画の趣旨からしても「短歌ください」は穂村の発話だと考えられるのだけど、「ほむらひろしに短歌をください」と言っているこの人は誰なのだろう。

わたしは語彙の殆どを

親から盗んだ。

ドナーカードのすべてに丸を。

芒川良

一人一つ（ものによっては二つ）しか持っていない臓器に対して、語彙は他者に伝えても減るわけではない。しかしこの歌では、子供に言葉を授けた親の語彙が、臓器提供をした身体同様に空っぽになってしまったかのような印象と、それにともなう罪悪感が述べられている。

引き出しの一番奥でふられる

綿貫 文

告白して振られたのだろうか。雨に振られたのかもしれない。どちらにしてもミニチュアの人形のようにかわいい。「引き出し」というのが二つの動詞でできている名詞であることも、この句のつかみどころのなさに一役買っている。

もったいないからあげる・

柿田中村

「もったいないからあげる・（なかぐろ）」と読めば七七になる。「・」は真ん中に挟まっていればカッコいいが（「ハードボイルド・ワンダーランド」とか）、後ろになにも付いていなければ塵のように頼りない。「もったいない」呼ばわりされる「・」が不憫だ。

光る源氏を浴槽へ流し込む

牛田 悠貴

「光源氏」を「光る源氏」と書くことで光源氏が光るところまでは了解したとして、「流し込む」ためには「光る源氏」は液体でなければいけない。しかし、このイメージは飲み込める、と思うのは、川に生息する「ゲンジボタル」を知っているからではないか。

うつくしい字を書いている

きみの髪が

烏の羽に見えてくるまで

福山ろか

黒く美しい髪の毛を「烏の濡れ羽色」と表現することがある。真っ黒な文字、髪、烏の羽というイメージの飛躍はどこか呪術的だ。山中千恵子の「行きて負ふかなしみぞここ鳥髪に雪降るさらば明日も降りなむ」も彷彿とさせる。

きっぱりと首を振る医者役のごま

榊 隆太

医者とは社会の中でわりと立派だとされているほうの職業で、「きっぱりと首を振る」ということは職能を存分に発揮している最中なのだろうが、でも、ごまなのだ。「ごま」に全てをさらわれるのが一周目、「役」という言葉の懐の深さにおののくのが二周目。

入梅の耳に涙があったかい

檜野 美果子

梅雨に入る。寝た姿勢で泣いているのだろう、耳に涙が入る。「入る」という動作が、季節と身体という異なるカテゴリーのもの同士を結びつける。梅雨の湿気や雨は「涙」とも結びつき、読んでいだけで雁字搦めになる感覚がある。

横でみる川面の光 生きるのは

一人でできるといえばそうだね

辻村陽翔

横並びで川を見ている。おそらく相手が言った「生きるのは一人でできる」という言葉に対して、「人は一人では生きられない」と正面から否定するのではなく、「たとえばそうだね」といったん受け止めてみる。そのことからしか、「二人になる」ことは始められない。

梨になるための座学のながいこと

松下 誠一

「なる」は現代川柳の十八番だが、なる前の準備期間にスポットを当てたところがおもしろい。ボディメイクの世界では下半身に重心がある体型を「洋梨型」などということもあり、椅子に座る姿勢のイメージともマッチする。